広島大学現代インド研究 ― 空間と社会　Vol.11: 39-42, 2021
Journal of Contemporary India Studies: Space and Society, Hiroshima University

書評 Book Review

ティルタンカル・ロイ著；水島司訳
『インド経済史：古代から現代まで』

名古屋大学出版会　2019 年　p.331　ISBN978-4-8158-0964-5

岡橋　秀典*

本書は，2012 年に出版された Tirthankar Roy の“India in the World Economy : From Antiquity to the Present”を全訳したものである。著者のティルタンカル・ロイはインドのベンガル出身で，現在ロンドン経済政治学院（LSE）の経済史・教授の職にある。LSE の教員紹介には，冒頭にこの本が紹介されており，著者の自負が窺える。さらに次の 3 つの課題に答えることが，経済史での主な仕事であるとしている。①インド資本主義に長期的パターンはあるのか，②このパターンにいつ大きな断絶が生じたのか，③今日のインド資本主義の理解に歴史はどのように役立つのか。研究上の重要課題が短く平易な言葉で語られていることに惹きつけられる。

本書の原題は，上述の通り「世界経済の中のインド」であるが，本訳書では「インド経済史」とし，内容に即した意訳がなされている。「はしがき」によれば，本書は，南アジアと世界の他地域との，長期の相互のやりとりについて述べたものである。その際，南アジアからの遠距離にわたる異文化間経済交流の古さを示すとともに，新たな技術や新たな共同関係のような外的要因と地理（本書では地勢と訳されているが，原語は Geography）のような内的要因が，どの様にこうしたやりとりを形作ってきたかを示そうとしている。

「はしがき」には，さらに重要なことが述べられている。この本の執筆のきっかけは経済学者や歴史学者による「グローバル経済史ネットワーク」への参加であったこと，本書はそこでのアジェンダであった「現代世界における国際的な経済格差の要因は何か」に刺激を受けているが，中心課題であった格差を本書であえて主題にしなかったことを明記している。その理由は，インドのグローバリゼーションの歴史を，ヨーロッパのそれに依存したものとする危険性があったからであり，その裏には，地域は，その地域の政治や地理といった要素に依存しながら，一定の自律性と独自のやり方によって，他の諸地域との関係を作り上げてきたとする著者自身の考えがある。

ここで，この方面の歴史の専門家でもない評者がなぜ本書を書評の対象としたかを断っておきたい。評者の専門は人文地理学であるが，1990 年前後から広島大学のインド研究のメンバーとして，南アジア，特にインドの地域変化について，農村や都市の現場を重視しながら研究してきた。そうした中で，人間文化研究機構の INDAS プロジェクトに加わる幸運に遭遇し，多くの刺激を得ることができた。その 1 つの成果は，岡橋・友澤編（2015）であるが，そこで評者はこれまで正面から取り組んでこなかった全国的な空間構造についても考察した。その際，気になっていたのは，歴史的な視点の不十分さであった。本書を手にとって，目次をざっと見たとき，港，後背地，陸のフロンティアなど，地理的なタームが目に飛び込んできた。「はしがき」には，地域の歴史における地理的要素の重要性が述べられ，また，多くの地図が挿入されていたことも障壁を低くしてくれた。ただ，結論的ことを先にいえば，時空間的に広大なインドの歴史を通読するのは，並大抵のことではなかった。

本書は，全部で 11 章から構成されている。第 1 章は序論であり，本書の基本的な問題意識と仮説が述べられている。以下の章は，全て年代順になっていて，タイトルの末尾に該当の期間が明示されている。まさに本書のタイトル「インド経済史」が適訳であることを証明している。

第 1 章　序論：インドとグローバル・ヒストリー
第 2 章　1200 年までの港と後背地
第 3 章　後退する陸のフロンティア　1200 ～ 1700 年
第 4 章　インド洋貿易　1500 ～ 1800 年
第 5 章　貿易・移民・投資　1800 ～ 50 年

* 奈良大学文学部

第 6 章　貿易・移民・投資　1850 ～ 1920 年
第 7 章　植民地化と開発　1860 ～ 1920 年
第 8 章　恐慌と脱植民地化　1920 ～ 50 年
第 9 章　貿易から援助へ　1950 ～ 80 年
第 10 章　市場への回帰　1980 ～ 2010 年
第 11 章　結論：新しいインド？

以下，章ごとに内容を紹介する。

第 1 章では，本書の問題意識を，インドとグローバル・ヒストリーの関係を軸として明確に述べている。異文化間の商品・アイディアの交換が人類史の重要な側面と考えるグローバル・ヒストリー研究者にとって，様々な文化を越える多くの交流の交差点であったインドは有益な事例であり，他方，インド史を知る有用な方法は，世界との交流の中でこの地域を研究することであるとする。その両面的な関係こそが本研究の視点の第 1 である。そこから多くの問題が浮かび上がる。数千年の交流史を貫く共通の糸，独自性をもたらす要素は何か，大きな異変が起きた時期はいつか，前近代と近代の「交換」は区別ができるかなど，考察の射程は実に大きい。そして，このような試みは「近代なるもの」に集中してきたグローバル・ヒストリー研究者の枠組みを超え，また土地支配や地税に没頭してきたインド経済史を超えることも企図している。著者によれば，それは地域的な視野からグローバリゼーションを綴ることに逢着する。第 2 の重要な点は，世界経済の不平等の生成を説明する支配的言説である「世界システム」について慎重であることである。ヨーロッパを中枢，インドを辺境とする地域間の階層モデルよりも融通性のある概念を求める。また，帝国と世界資本主義の歴史叙述は，世界経済への「包摂」を基軸とするが，それは「前近代」を単一の特徴のない時期とみなす危険性があり，また多様で不均一な地域を看過することになるとみる。壮大な理論の問題点をついた重要な指摘である。そこで代案とされるのは，世界についての 1 つの概念に依拠するのではなく，1 つの地域に軸を置くグローバル・ヒストリーである。そして「この企てに取りかかる最も簡単な方法は，まず地理から始めることであろう」として，交易，貿易など豊富な事例を提示しながら，地理的な要因の意義を述べる。それを踏まえて，地域の要素については地理的な可能性と制約が明確であり，インド人の「取引し，交換し，交易する性向」さえも文化的ではなく，特定の地域やコミュニティの地理的位置による低い取引コストによるとする。このような内的制約に対し，外的環境である国家は，運輸・通信技術の改良を通じて空間的・市場的統合に影響を与えてきた。この序論の密度は高く，この章を読むだけでも十分価値がある。

第 2 章は，紀元前 500 年から紀元 1200 年までで，地理的条件が交易に対して特に制約的であった時代である。西暦の初めには，商品と人の動きが 6 つの地域システムで生じたとしている。これらは 3 つの地理的条件，航行可能な河川に近い立地，河口部もしくは河川と大洋の移行地帯に安全な港を有すること，山間部へ通じる道路，のうちの 2 つを備えていた。グローバルには，インド・ローマ交易，インド西岸と西アジア・地中海との交易，インド東岸，ベンガルの交易に触れているが，データは断片的であり，長期的な変化のパターンを構成するのは困難としている。そうした中で，船舶技術に注目し，それが 17 世紀までほとんど変化がないことから，交易の規模は増加しても，大きな船や危険度の高い航海への出資を商人に促す状況には達していなかったと推察する。この点は見事な考察である。

第 3 章は，1200 年から 1700 年の 500 年間を扱う。この時期には，デリー・スルタン朝，そしてムガルと，陸を基盤とした帝国が強固になる。それとともに，港と内陸都市を統合しようとする試みがなされたが，陸を基盤とした生産活動と海洋交易の統合は限定的なままであった。帝国はしっかりした海洋政策をもたず，商業的関心も弱かったので沿岸部に大きな影響を与えなかったのである。他方，北インドの河川沿いで都市化および都市間接触が強化され，商業空間の統合が進んだ。農業と農民を優先的に扱い，外国交易を放置していたとする。

第 4 章は，1500 ～ 1800 年の間のインド・ヨーロッパ間貿易の発展を扱う。第 3 章の後半の 1500 ～ 1700 年の 200 年間がこの章と重なる。ムガル帝国により陸の空間統合が進められたが，沿岸部ではポルトガルの進出，東インド会社の台頭があり，その中でボンベイ，カルカッタ，マドラスの驚異的成長がみられた。この章は章別で最も大きな分量が割り当てられており，ポルトガルや東インド会社の活動，国家の形成，さらに都市の性格などについて詳細な記述がなされている。

第 5 章と第 6 章は，共にイギリス植民地下の貿易・移民・投資を扱う。第 5 章は 1800 年からの 50 年間，第 6 章は 1850 年からの 70 年間である。

第 5 章の時期は，帝国の傘というべき，緩やかな領域ネットワークが形成されていく時期であり，また帝国が強化された時期であった。そして，様々な革新による実験と，商人，企業等の統合の時代でもあった。貿易では，イギリス東インド会社がインドからの綿布

輸出の地位低下を補うために行った新事業，中国茶の支払いの手段であったアヘン，イギリスの綿布工業に貢献した染料のインディゴ，繊維原料の綿花に焦点が当てられ，特に綿花栽培の問題点と改善への試行錯誤の過程が詳細に描かれている。イギリス帝国の奴隷制廃止に伴うインド人契約移民の労働移動の展開，インドでの製鉄などの工業の実験的な事業についても述べられている。

第 6 章の 19 世紀後半には，海外貿易と国内交易がともに増加し，また鉄道の敷設で陸と海が統合され，商品輸送費が大幅に削減された。しかし，貨物運搬コストの競争力は地域によって異なり，インド中央部や南部で大幅に下がったのに対し，河川航路に沿う地方では，鉄道と対抗できるほど安価であった。市場の統合と商業における新しい種類のアクターが工業化を実現可能なものにした。資本と同様，労働供給も鉄道や船の移動コストが劇的に下がったので，移民や季節移民を増大させた。また移民が形成した社会では，カーストの階層関係が崩れることにも触れている。

第 7 章は，イギリス帝国がどのようなプロセスを通じて経済変化を導いたのかが検討される。マルクス主義者の従属論的な低開発論を検討し，これに基づくイギリスのインド統治時代におけるインドと世界経済の関係についての公式見解「帝国は非工業化をもたらし，資源を流出させ，搾取的階層構造を作ることで，インドに貧困を招いた」を，資本家の存在，工業化，技術の性格，職人の伝統の再創造などから批判する。著者はより中立的な立場を採用することで，法，言語，技術の交換における帝国の傘の効果に言及し，イギリスのノウハウが，インドの資本，労働力，自然資源に加わったことによる技術的発展を正当に評価する。

第 8 章は，両大戦間期の状況，恐慌，脱植民地化，帝国システムの崩壊のプロセスを対象とする。恐慌が頂点に達した時期に，実はインドの純国内生産はほとんど変化しなかった。恐慌はなぜインドにほとんど被害をもたらさなかったのかが周到に説明される。恐慌の後の経済ナショナリズムはインドを脱植民地化に動かしていく。特に，インドの企業が会議派に結集していくプロセスの説明がマルクス主義者の説明と大きく異なっているのは興味深い。

第 9 章は，独立後の 30 年間を扱う。この時期は，本書のこの時期までの記述から明らかなように，対外関係で劇的な実験がなされた。それまでの海外貿易と投資路線から身を引き，代わって市場統合を終結し，援助資金に依存した国家主導の工業化路線に転じた。それは国内の民間企業を保護したが，かつての輸出志向産業を衰退させ，民間部門の知識移転も滞らせた。この体制で最も重要な成果は，海外からの農業知識の普及であったという。労働だけは制限のない領域であり，移民が西洋の科学者や技術者の需要に対応し，またその一部は労働者から企業家に成長し，その後の世界市場への劇的な復帰の 1 つを用意したとする。

第 10 章は 1980 年以降で，今日の経済成長に至る過程を扱う。ここでの著者の見解は明瞭である。世界経済との再統合は，正式に宣言されたいかなる改革に由来するものではなく，それは 1970 年代後期に非公式に始まった，小規模の労働集約的工業における資本蓄積と競争，および公的に表明されなかったインド通貨の弱体化によるものであった。公的な改革が広がったのは 1992 年以降で，2000 年代に知識集約型産業の輸出などの形で花開いた。それは，19 世紀の自由政策への回帰であった。伝統的な労働集約的製造業に光を当て，それがインド経済に果たした役割を詳細に述べている点に大きな特徴がある。

第 11 章は，結論の章である。本書の議論から，グローバリゼーションの物語は，成長の物語と区別すべきという教訓を導き出す。本書は商業史であると述べるのはそのゆえであろう。得られた重要な仮説的結論は，①インド史では，境界を越えて商業を行うことは，好適な地理的条件を利用するか，もしくは不適な地理条件の障害を克服するかという問題であった。②帝国は地域を統合する媒介者であり，取引コストを縮小する媒介者でもあった。③地域国家による陸と海の統合の試みにも関わらず，2 つの世界の関係が決定的に変化したのは，ようやく 19 世紀であった。それを成し遂げたのは鉄道であった。④イギリス帝国は市場統合を目的としていたため，19 世紀のグローバリゼーションを過去と異なる多層にわたる接触の回路を有するものとし，それが工業化を導きサービス経済の基礎を築いた。⑤今日のインドは以前の時代に生み出された基礎の上にあり，2000 年代は市場統合のプロセスへの回帰であった。最後にインドの知識経済の発展に貢献した教育の役割を評価している。

以上，駆け足で内容を紹介したが，やや評者の関心に引きつけすぎた感は否めない。また，この方面の知識不足のため間違った理解をしているかもしれない。この点をお断りした上で，最後に，本書についていくつか気がついた点を述べておきたい。

本書の特徴の第 1 は，マルクス主義をはじめとした諸理論に目くばりしながら，それらと一線を画して，中立的立場（著者の表現）から独創的見解を展開していることである。随所に通説への批判がみられる。ま

た，第 1 章の理論的考察には学ぶべき点が多々あり，特に評者にとっては，上述した，「包摂」論の落とし穴の指摘が貴重な示唆を与えてくれた。

本書のもう 1 つの特徴は，著者自身が本書を商業史といっているように，豊富な交易活動の記述である。それは一般の読者にとってはやや苦痛な面もあるが，決して史実の羅列にはなっておらず，論の展開につながっている。評者にとっては思いがけない掘り出し物に出会う喜びもあった。第 5 章のボティヤ商人によるインドチベット交易の記述は，彼らの活躍を詳述している。今日ボーダー研究が脚光を浴びる中で，独立後の中印国境の封鎖に対する彼らの対応も重要だが，当時の交易についてもよく検討する必要があることを教えてくれる。もう 1 つは，第 6 章にある，バンジャーラー・キャラバンのデカン半島部における輸送の記述である。1790 年頃，17 万頭の牡牛を使い，穀物，綿花，塩を運んでいたという。評者は，かつてヴィンディヤ山中のバンジャーラーの村落を調査したことがあるが（岡橋ほか，1992），なぜ彼らがこのような辺鄙なところに定着したのかよくわからなかった。本書を読んで彼らの栄光の歴史が蘇ってきて，キャラバンルートとの関係の重要性に気づかされた。

評者のような現代インドを研究するものにとっては，近年のインドの発展についての見解も興味深い。小さな町の小規模の労働集約的企業が果たした役割に注目する点が特に重要である。下からの発展論ともいえるが，この見解は柳澤（2014）の見解と通底するものがある。

冒頭で述べたように，地理的記述への配慮も本書の特徴であろう。7 枚に及ぶ地図，北部と中央，南部，東部，西部の 4 地区に分けた年表，本文における地理的用語の使用などである。これらのことは当然読者の理解を助けているが，陸と海の統合のダイナミズムが本書のメインストリームに置かれていることが我々の関心を引く。評者は，岡橋・友澤編（2015）で植民地モデルとしてインドの内陸と沿岸の格差に言及したことがあるが，本書を読んで，それ以前の長い歴史における地域間関係の重要性を見出すことができた。ただし，本書の地理的記述は，現代に近づくにつれて急速に薄れていく。残念ながら，第 8 章以降には，地図は用いられていないし，地理的条件への言及もほとんどなくなる。現代インドにとって，それまで見出された地理的側面はどのような意義をもったのだろうか。沿岸，内陸の格差について未だ大きいことが述べられているが，それ以上の考察は残念ながら認められない。

巻末に収められた「訳者解説」では，専門家の立場から本書の評価がなされており，本書の理解に役立つ。翻訳は直訳を重視しているが，読みやすい。翻訳に当たられた水島司氏をはじめとする各位の労を多としたい。

本書は，インドの歴史が，世界の大きなうねりの中で，広大なインドの大地の上に展開したことがよく理解できる書物である。現代インドを考えるのにも役立つ書物として，ぜひ一読をお勧めしたい。

文献

岡橋秀典・友澤和夫編（2015）：『現代インド 4　台頭する新経済空間』東京大学出版会.

岡橋秀典・友澤和夫・藤原健蔵・河野憲治・ナート，M.L.（1992）：ビンディヤ山地におけるバンジャラ村落ナハルケーダの変容．地誌研年報，2，163-190.

柳澤 悠（2014）：『現代インド経済―発展の淵源・軌跡・展望―』名古屋大学出版会.

（2020 年 10 月 26 日受付）